

たぐみ

Craftsmanship

特集 読谷壺屋 金城窯三代展
 特集 井上泰秋・尚之父子作陶展

第28号

三島の編み組細工と

「会津学」

先月たぐみで開かれた「奥会津三島町生活工芸展」で、五十嵐三美さんによる山ぶどう蔓手籠の製作実演は会期中をとおして大変な人気だった。いま、

もの作りの現場を直かに見るものがほとんどないだけに、山ぶどうの蔓のなめしや寸法揃え、そして編み組などの仕事の工程を飽きることなく眺め、確かめ、質問をし、納得する人たちの姿は、嬉しくも心強いものであった。

四季の植生の豊かなわが国では、樹木はもとより山に自生する山ぶどうやあけび、またたび、楮や藤、篠竹などが生産や生活の場で広く使われてきた。縄文時代の遺跡からも、それらの籠などが数多く出土している。

里山や田畑では苧麻からむしや萱かや、菅すげ、稲藁いなわらなどが人々の暮らしに欠かせない衣服や住居、生活道具、肥料の材料として身近かであった。そういつたことが近年

ほとんど忘れ去られてしまっている。

私たちの生活が自然の恩恵のもとにあることが叫ばれながら、そのことを実感として知ることのない現代人を目覚めさせるには、まさに伝統の手仕事の復興によるしかないのではないか、そう思わされた一週間であった。

その折りやはり会場に常勤された長老の五十嵐久さんとも東北や奥会津の四季の風土や民俗について語り合ったのであった。雪深く酷しい暮しの中、どれほどの自然の恩恵が秘められていたか、それを活用してきた人々の知恵がいかに素晴らしいものであったのか、語り学び、その翌日、久さんから「会津学」と題する大冊の本をいただいた。

その本の内容の豊かさや稀少の価値は読んでいたくほかないが、二十余名の男女による文の見出しの一部を記すと「会津桐の民俗土壌」「渡部家の夜話」「苧の道」「溪流の自然誌」など。

編集は奥会津書房(0241-52-3580)

(志賀直邦)



線彫り草花文皿(次郎)



八角瓶(敏男)



えび文緑壺(吉彦)



四寸マカイ(吉広)

金城次郎追悼
読谷壺屋 金城窯三代展

— 金城次郎・敏男・吉彦・博美・正治・吉広 —

会 期 平成十八年十月二十八日(日)～十一月四日(土)

十月二十八日(日)、十一月三日(文化の日)は営業いたします。

会 場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)

金城窯二代展に思う

志賀 直邦

たくみで沖縄の陶器を店頭で常陳したのは、いつ頃からだったろうか。昭和十四年から十五年にかけての「月刊民藝」誌の記事を読むと、その頃渡琉

した民藝協会同人の協力で、沖縄の工藝品の数かずがたくみや日本民藝館宛に送られているのがわかる。たくみか



イチチン徳利 (博美)

らも仕入担当の鈴木訓治が同行し、壺屋の焼物や緋や紅型などの仕入れに奔走している。

金城次郎さんは当時まだ若く賃職人として働いていたが、その腕のほどは濱田庄司や河井寛次郎にも認められていた。のちに彼は講談社刊「現代の陶芸」に次のように書いている。

「昭和十四年になると、柳先生をはじめ、多数の人々が大挙来島された。そして沖縄のあらゆる面で調査研究をされると同時に、地元でそのすばらしさについて指導助言をされた。私もそのときに、沖縄の陶器を改めて見直し、その良さを知ることになった。」

戦前の壺屋陶器の仕入は資料を見る限り新垣栄盛の東又窯、新垣栄徳窯、

小橋川仁王窯や、南蛮焼では南風窯などだが、十五年の「月刊民藝」誌に出ているたくみ店頭の琉球陶器の陳列写真を見ると、その過半がまさに次郎さんの作風なのである。

これは金城次郎の技と人柄に惚れこんだ濱田庄司の選択の証しか。いずれにせよ戦後那覇の壺屋に独立して仕事場をもち、四十七年（一九七二）読谷村座喜味に登り窯を築いて今日に至る、金城窯とたくみのお付き合いは実に六十年を超えるのである。まさに三代展と称する由縁である。

そして父次郎の仕事を生半にわたって支えつづけた二代目敏男さんの力量も、沖縄でゆるぎない評価を得ている。吉彦、博美、正治、吉広さんたち三代目もしかりである。

一昨年十月の第一回展からちようど二年、作者の皆さんの志と成長の軌跡をご覧いただき、いつそうのお励ましを頂きたいと思う。

熊本・小代焼ふもと窯

井上泰秋・尚之父子作陶展

会 期 平成十八年十一月十八日(土)～二十三日(木)

十月十九日(日)、は営業いたしません。

会 場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)



井上泰秋さん(右)と尚之さん

作り手から見た

小代焼の特長と魅力

小代焼きの特長と魅力を端的に云いますと、その特長は、小代粘土を主原料に、釉薬は木灰、藁灰などの灰を用い、一二五〇～一三〇〇度の高温で焼き上げたものです。天然の灰釉が織りなす流しの変化の美しさは、底知れぬ魅力を持っています。

作り手から少し詳しく述べてみましょう。大きな特長は陶土です。可塑



小代焼ふもと窯の登り窯

井上 泰秋

性に優れた粘土層は、小岱山の西側にしかなく、明治時代まで焼き続けられた瀬上窯、瓶焼窯は現在、荒屋市府本地区や平山地区から陶土を運んでいきます。しかし昭和初期まで焼かれた南関の野田窯は、堀池園の周辺から採土されています。陶土は採土する場所によって鉄分の多い処、少ない処、粘り気の強い処、少ない処、耐火度のある粘土、



大皿(泰秋作)とスリップの食器(尚之作)

そうでない処など多種多様な粘土層があります。近年土地の開発や、住宅が建ち込んで掘りづらくなっています。

このように粘土層が豊富なことから、奈良、平安時代には、一大窯業地帯として形成されてきたことが、須恵製の窯跡群の発見によってわかります。おそらくこの事實は、のちの加藤清正も承知していたものと思われ、清正公は御用窯として、朝鮮から連れ帰

った陶工、井戸新九郎を招き、通称「古畑」小代焼の発祥の窯を興したものと考えられます。

小代焼は鉄分の多い土で作られているのが特長の様に言われていますが、一概には決められません。古作のもので、鉄分の少ない土で作られているものも結構あるからです。ただ鉄分の多い土で作った方が焼縮まりがよく、小代焼のように灰釉を掛けて焼く場合、釉薬の調子が良く、特長の海鼠色がよく発色します。

陶土は一ヶ所の土で作るより、層の違った陶土を混ぜて作った方が、乾燥の時、ひび割れや、焼き損じが少なくなります。野田窯では歩留りが一層よくなる様に、天草陶石を混ぜて制作されています。中には磁器質になっているのも焼かれています。

小代焼の古作のものは、高台脇から高台内にかけて釉薬がかけられておりません。すなわち「土見せ」になって

います。別に茶陶として土見せにしてあるものではありませんが、土見せになっていきますと土味を見て、何焼か、いつ頃の作かなどの判断が出来る、重要な目安にもなるのです。成形の方法は、九州各地の伝統窯同様、蹴轆が使われています。作る回転方向は、右、左、それぞれあるようです。成形方法として、一個一個作る「玉づくり」、小物

などを作る時は「引き作り」、他に紐作りしてあと轆轤で挽き伸ばす作り方、紐作りして当て木と叩き板を使う叩き作りなどがあります。轆轤を使わず、手づくね、木型や素焼の型を使つての型づくり、平に伸ばした踏鞴(たたら)作りなどがあります。近年では、蹴轆轤のかわりに電動轆轤が普及しています。型は石膏型が使われています。

成形時に施す装飾として、輪花文、櫛目は柔らかい内に、半乾きの仕上の段階で、鑄、面取り、飛鉋、貼り文、刷毛目、透し彫り象嵌などを施します。

特長の釉薬は灰釉が使われます。地に釉に使う灰釉は、木灰(土灰)をベースに、長石、藁灰、それに鬼板や紅柄を適量に加え造ります。青小代、黄小代、鉛小代と呼ばれる釉調は、素焼をした器に掛ける釉薬の厚味、素地に含まれる鉄分の度合い、焼く炎の性質(還元から酸化)で色合いは変わってきます。白小代や、流しの白釉は藁灰をベースに造ります。

「藁白打掛け流し」と云う掛け方は、地釉を掛け、表面が余り乾かない内に柄杓に適量の藁白釉を入れ、少し離れた所から、打水をすることがよく打ち掛けます。同じ方法で掛けても、二つと同じものが出来ないのが打掛流しの大きな魅力の一つです。

特長である灰釉と土味を一番よい条件で焼き上げるには、薪を使って焼く窯が最適と、古作の作品を手にした時に改めて強く感じます。常に小代焼の制作に携わり、登り窯の火を見詰め、

そして作品を手にした時、底知れぬ魅力にとりつかれてしまうのは、今の私と同じく、昔の陶工も同じ気持ちではなかったでしょうか。

小代焼は十二の窯元が集結し、平成十五年に国の伝統工芸品に指定されま

「秦秋さん」

井上秦秋さんのことを私たちは「秦秋さん」と呼んでいる。目上の方にも拘らずさん付けで呼んでいる。館展の懇談会の時でも、その後繰り出す居酒屋でも誰もがそう呼ぶ。

館展をはじめ、国展、日本陶芸展、西日本陶芸美術展などで大きな賞を受賞して、作陶五十年を迎える井上さんを「秦秋さん」と敬愛をこめて呼ぶ。人柄がそう呼ばせる。

秦秋さんは種田山頭火と坂村真民が

した。これを機会に窯元同士の連携を深め、研鑽し合い四百年の歴史、すばらしい伝統を後世に伝えて行きたいと思えます。

(熊本県立美術館「小代焼展」図録より転載)

笠原 勝

好きで、話の折々に出てくる。山頭火は今の若い人達にも馴染みがあるが、真民となると知る人は滅多にいない。熊本出身のこの詩人を愛する秦秋さんも詩人同様に心優しい人なのである。それ故、多くの人が慕って集まってくるのだと思う。

私が初めて小岱山の麓の秦秋さんを訪ねたのはかなり前のことだった。遅い時間に関わらず温かく迎えてくれた。奥様手作りの「たじ汁」をご馳走になっ



小代焼ふもと窯の外観

た。翌日は佐賀の硝子屋に行くと言うと「自分も見たい」といって車で送ってくれた。同じ窯業でも正反対の仕事にすら興味を示す研究熱心な人柄だ。この研究熱心が古小代の復元を成し遂げた力なのかもしれない。工房の資料館の夥しい発掘陶片を前にすると改めてそう感じざるを得ない。

後継者、尚之君も泰秋さんのDNAを確実に受け継いでいる。いまはスリップウエアに熱中して、食卓を楽しくしてくれる食器を熱心につ作っている。人吉魚座民芸の上村正美さんの助言を受けたことも彼の大きな力になっていることと思う。小代の土と釉薬で挑むスリップウエアがこれからどう発展していくか楽しみである。

振り返ってみると民窯では、船木道忠・研兒、佐久間藤太郎・孝雄・賢司、太田熊雄・孝宏、金城次郎・敏男、などの親子展があつた。父から子へ、そして孫へ。表現方法は違つても確実に伝えられていく伝統があつた。小代ふもと窯でも伝承されていくことと思う。

東京での初めての親子展、多くの人に見ていただき、地方民窯の現況をつぶさに感じていただきた。そして地方在住の作り手と消費地東京での交流を通して益々の小代の発展を期待したい。

(たくみ)

ロシア
エルミタージユ美術館で

「日本の色彩」

芹沢銈介の世界展開催

この秋、十一月十日からサンクト・ペテルブルクのエルミタージユ美術館で表記の「セリザワ」展（静岡市の協賛）が開かれるという。芹沢銈介の海外での大きな展覧会としては、一九七六年十一月から四カ月の間、パリのグランパレ美術館で開催された「セリザワ」展がある。このとき日本側の委員であつた金子量重氏が本誌26号に「セリザワ風パリを吹く」と題して、その盛況ぶりと現地での高い評価を伝えている。

ロシア人も美と藝術への感性が豊かだから、芹沢作品を観て、きつと素直に嘆賞するにちがいない。

たくみ歳時記

芹沢図案型染カレンダー

たくみの山本正三の発案で芹沢銈介先生が型染カレンダーを製作されてから、来年度版で61年目になる。昭和五十九年の先生の没後は、ご子息の長介氏(東北大名誉教授)の監修で継続して製作、刊行されてきた。

芹沢版カレンダーやクリスマスカードは戦後、来日アメリカ人の強い要望と支持があつて今日まで続いたのだ



上 型染カレンダー(12枚組) 16,275円
下 卓上カレンダー(印刷) 1,102円

が、昭和二十八年二月の「月刊たくみ」に面白い記事があるので紹介しよう。

ロックフェラー夫人来店

「インドへの途次、日本へ立寄られたロックフェラー夫人は、到着の翌朝たった一人で来店せられた。確か三度目である。商品が大変増加したといつて喜んでおられた。八尾の朱ロソク、松本の木製ロソク立など求められた。九日に再度白洲正子夫人と御一緒に来られて、芹沢先生の紙漉染絵やカレンダーを購めてゆかれた。

柳先生が留守で会えないのを大変残念がっておられたが、それでも出発の十三日寸暇を割いて民藝館にも見えられた。いうまでもなく夫人のご主人は有名なアメリカの石油王である。

あとがき

美しい国日本、そしてカントリーアイデンティティの回復などと美辞麗句を重ねる安部新首相だが、抽象的過ぎるその思いは国民には伝わりにくい。近代日本において国民意識の大きな転換点というと、明治維新と一九四五年の敗戦である。日本人の適応性についていえばその良き例の一つは太陰暦から太陽暦への切り替えであろう。

上古から千年以上にわたって用いられた、農事や祭祀諸行事に深くかかわり、その販布も伊勢神宮の独占であった陰暦を、国際水準に合わせて明治六年一月一日より陽暦に変えたのであった。

一部に人民の反抗蜂起も懸念されたが国民はすぐ順応し、公的には太陽暦、都会ではその一月月遅れを、農村では陰暦をと三様の対応であった。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)